

避難判断学習＋避難路地図づくりで防災力アップ

玉川大学 教授 教育学部長・通信教育部長 寺本 潔

1. “いつ逃げるの？” “今でしょ！”

自然災害への対応は、体験的な避難訓練が確かに効果的であるが、訓練だけに力点を置きすぎると自己判断力が萎えてくる。避難の行動自体が人まかせになり、自己判断を伴った防災力（生き抜く力）のアップにつながらない。そこで重要なのは、「いつ逃げるのか」という判断の分かれ目を知ることと、適切な避難路が児童の頭の中に地図として描かれていることの2点である。ここでは、多くの都市部が低地にあることから、水に関する災害を例に地図を絡めた指導のポイントを述べてみたい。

一般に、予知がまだ困難な地震災害を除き、水災害（外水氾濫・内水氾濫、津波・高潮、土砂災害など）に対しては气象台や自治体から大雨・洪水警報や避難準備情報、避難勧告などが先に出され、最終的な避難指示（避難命令）が発令される前に一定の時間（ときとして短い場合もある）が生じる。このとき、重要な判断ポイントは「いつ逃げるの心構えや準備をするの？」である。やつぎばやに出される「各種注意報・警報や避難準備・勧告・指示などの用語の意味（状況）」を理解しておかないと、人はいわゆる「正常化の偏見*」に支配されやすく、たとえ避難指示が出ても動き出さないことが指摘されている。児童には確かな判断力を育てたい。具体的には、国語辞典と自治体から配布された防災パンフレットなどを用いて用語の意味（できればその自治体での降雨や河川の状況も合わせて）を

ていねいに扱う授業場面を用意したい。ともすれば曖昧にとらえがちな避難判断の意味そのものを学習させるわけである。“いつ逃げるの？”（それは）“今でしょ！”と自信をもって判断できるようにしたい。

2. 避難路地図はバリアが鍵

次に、避難路地図づくりの指導ポイントを解説したい。本誌1学期号で紹介した手づくりの防災マップや自治体のハザードマップを読み取らせたとき、児童が安全で避難しやすい経路を頭の中の地図に描けるようになることが肝要である。例えば、「この雨の降り方では、学区のあの用水路はあふれるかも、だからあの道を通るのは避けよう。」という具合に避難路を選択できる能力がほしい。そのため、避難路地図には、そういった豪雨時の想定も書き込ませるようにしたい。とくに、**避難所や自宅までの行く手をさえぎるバリア（障害物）の認知は鍵となる**。バリアの種類は、線路や横断に手間取る幅員の広い道路、下り坂や長い堀、フェンス、側溝のグレーチング（鋼材を格子状に組んだ溝蓋）やマンホール、車の列、アンダーパスなどの箇所が考えられる。また農村では豪雨時は農道も川と化す場合があり、低学年児童などは、足をとられやすい。集中豪雨は近年頻度を増しているにもかかわらず、「通学路で通りなれているし、大雨でも大丈夫だよ」との油断は禁物である。

3. 導入授業で正しい歩き方を考えさせる

愛知県岡崎市の小学校で水防災の授業を行

* 異常な事態に直面していながら、「たいしたことにはならないに違いない」「自分は大丈夫だろう」と思い込み、危険や脅威を軽視してしまうこと。

った。授業の導入で次のイラスト（写真1）を提示した。このイラストは、筆者も策定委員で参画している愛知県建設部河川課の新しい水防災プログラムで開発された新教材の一つである（愛知県のホームページから検索できる）。

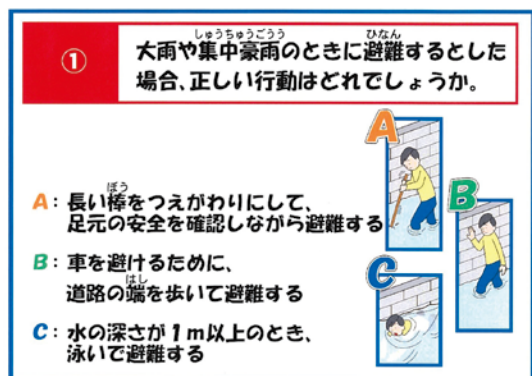


写真1 大雨時の正しい避難を選ぶ設問
（愛知県・みずから守るプログラム教材集より抜粋）

正解は、長い棒で足元の安全を確かめながら歩行するAである。授業でこのイラストを提示すると8割の児童がAを選択できるが、すかさず筆者は「長い棒がもし手元にない場合はどうするの?」「壁沿いに歩いたほうが安全では?」「〇〇君は水泳が得意だからCがいいんじゃない?」と児童の判断をゆさぶりながら進めていった。その後で、道路脇にある溝やマンホールの写真を提示し、やはりAが正しいことを確認した。さらに市役所で作成されている洪水実績図（5年前の岡崎水害で水が溜まった箇所とその水位の地図）を提示したことで、自分たちが日頃遊んでいる公園や公民館の近くが75~90cmと案外水深が深くなりうるということがわかり、導入で使用したイラストが現実味を帯びてくる効果が生じた。



写真2 大雨時に75cmの水かさが見童の腰の位置までくるとを測って示している様子。背景のボードに水害実績図がはられている（授業者は筆者）。

写真2のように、浸水した水位を見童の体に合わせるなどすると、いっそう想像力を刺激でき、効果的である。

4. 学区や市の高低学習こそ防災力の要

社会科3年の単元「わたしたちの市のようす」や5年「自然災害の防止」に、学区や市の高低を学ぶ箇所を設けるべきである。3年では川の筋や建物が集まっている地区のようすは扱うが、**土地や建物の高低に焦点が当てられていない**。5年では国土の災害の特色は扱うが自分の市におきかえては扱われない。

一方、沿岸部の町では電柱に海拔表示が、建物には避難ビル表示が整備されつつある。川沿いには洪水の危険度を示す看板もある。多くの自治体では各種ハザードマップも整備されてきている。それらを活用しつつ、学区独自で、前述した避難を妨げるバリアや高低に焦点をあてた避難路地図づくりを実践すれば、防災力は確実にアップする。

命を守る防災宝箱



- ①大雨、洪水警報や避難勧告・指示など避難を呼びかける用語の意味を扱う。
- ②避難路地図には、児童にとっての避難を妨げるいろいろなバリアも書き込ませる。
- ③水災害に関しては、学区や市の高低を扱う社会科学学習が防災力アップの要となる。